The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	契沖、曼陀羅院・圓珠庵
Author(s)	八木, 毅
Citation	懐徳. 1955, 26, p. 67-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90287
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

契沖、曼陀羅院・圓珠庵

八木　毅

今から約二百五十年前のことである。元祿十四年の一月二十五日といふ日に、契沖は日本古典の注釋や字音研究の上に大きな足跡をのこして大阪市天王寺區餌差町（市電上本町四丁目東へ二丁北側）の圓珠庵で六十二歳の生涯を靜かに閉ぢた。

契沖の學問とその傳記および傳記資料の研究紹介に最も大きく寄與して來られたのは久松潛一博士であつて（契沖全集第九卷參照）、久松博士の作られた契沖略年譜を借りれば次の如くである。

①尼ケ崎時代　1歳（寛永17年）—11歳（慶安3年）
②今里妙法寺時代　11歳（慶安3年）—13歳（承應元年）
③高野山時代　13歳（承應元年）—23歳（寛文2年）
④生玉曼陀羅院時代　23歳（寛文2年）—27歳（寛文6年）
⑤再高野時代　27歳（寛文6年）—29歳（寛文8年）
⑥和泉久井時代　29歳（寛文8年）—34歳（延寶元年）
⑦和泉万町時代　35歳（延寶2年）—38歳（延寶5年）
⑧攝津我孫子時代　38歳（延寶5年）—39歳（延寶6年）
⑨再妙法寺時代　40歳（延寶7年）—51歳（元祿3年）
⑩圓珠庵時代　51歳（元祿3年）—62歳（元祿14年）

右のうち④については契沖二百五十年記念講演會において久松博士は、「契沖は十一歳の頃、妙法寺に入り、丰定のもとに徒弟となり、二年ほど後、眞言宗の本山、高野山へ修行に出、十年の後、廿三歳の頃、曼陀羅院の住職になつている。この院は丰定の兼務してゐた寺であつたらしい。曼陀羅院に三四年ゐた後飄然として寺を去つたが學問に生きようとする契沖は、學問と寺の雜務との矛盾に惱んでゐたやうであります。契沖の去つた後は丰定がひとりで曼陀羅院の維持にあたつてゐたらしい。」と述べてをられる。

そして今までの調査では⑤以後契沖は再び曼陀羅院と關係があつたといふことは、知られてゐないやうである。

生玉曼陀羅院といふのは生玉十坊といはれた生玉神社

内における塔頭のひとつであつた。摂津名勝圖繪には、南ノ坊法案寺以下、櫻本坊・新藏院・遍照院・曼陀羅院・觀音院・醫王院・地藏院・覺圓院・持寶院の九ケ寺の名が見られる。それらは明治初年の廢佛毀釋に遭つて櫻本坊は圓照寺に、遍照院は青蓮寺に、地藏院は藤次寺にといつた具合に他寺と併合していつたり、南ノ坊の如きは下高津の現在地に立退いたりした。曼陀羅院は現在持明院に併合されてゐる。大正六年十二月に圓珠庵で歿した藤村叡運は、圓珠庵の前にはその生玉持明院の住職であつた。戰災で過去帳など資料とすべきものを失つてしまつてゐる今日、契沖以後明治以前の間における曼陀羅院と圓珠庵との相互關係を知ることは非常に困難であるが相當密接な關係にあつたのではないかと想像される。

略年譜の⑩圓珠庵時代といふのは契沖が一切の雜務から解放されて古典の研究に專心した時代と思はれてきた。

元祿八年、墮落した寺々の風紀をひきしめ、かつは切支丹宗門取締りの必要からか「寺院五人組判形帳」といふものを作つてゐる。そのはじめにかうある。

差上申一札

先年大坂天滿諸宗寺々五人組之帳差上候今度も五人組を相改致連判上可申旨被仰渡則書上候。五人組連判之内不致吟味宗旨手形を出し旦那中に切支丹宗門之者御座候歟其外不依何事公儀御法度相背候はば本寺へ被傳達、本人は勿論依其時之品五人組共越度一々被仰付由、奉得其意候。組中常々平吟味可仕候。向後五人組替り又者印刻仕替候はば御斷一々申上候。

爲後日仍如件

元祿八乙亥年九月

この判形帳を開いてゆくと

眞言宗古議生玉社僧　高野山寶性院末寺曼荼羅院

以下南ノ坊を除く八ケ寺の名が列び、生玉社九ケ寺による寺院九人組を編成してゐることが見え、持明院は寶珠院・奥德院・大福院の後に付して四人組をなしてゐるのをみると曼陀羅院を併合したこの持明院といふのは本來生玉十坊外のものであり、寺格も曼陀羅院よりは低かつたものと考へられるのであるが、曼陀羅院が持明院の中へ解消していつたのはどういふ事情によるものか筆者には分らない。

それはさておき、右の曼荼羅院のところには「契沖」といふ角印がおされてあることが注目される。元祿八年九月といへば、契沖が圓珠庵に入つて五年目五十六歳の頃である。今のところ、その前後に渉つて契沖が曼陀羅院の住職を兼務してゐたことを實證すべき資料がないの

で確定的なことが言へないのは殘念であるが、もともと曼陀羅院には檀家が多かつたといふことであるから、寺務も相當あつたことが考へられるし、契沖との因緣もあり、さらには契沖自身の研究生活の資を得しめるために「兼職」といふ實のともなつた閑職をもつて遇したものとも思はれる。（當時南ノ坊は三百石の扶持をうけ、その半ばを以て塔頭九坊の經營に充ててゐたと言はれる）この頃の契沖は紀記歌謠や古今集・百人一首などの註釋や伊勢物語の研究を一通り完成させ、和字正濫鈔を刊行したりして晩年の研究生活の最後を飾つた時代であつたといへる。この元祿八年註以後には萬葉集の講義をした以外に大して目星しい業績ものこしてゐないのを見ると、曼陀羅院の兼職が或ひは「閑職」ではありえなかつたことを物語つてゐるのかも知れない。圓珠庵隱棲後の契沖がどこから生活の資を得てゐたかはよく分らないが、久松博士は、彼が水戸義公の依頼で萬葉集代匠記を著述した關係で、主として義公から生活上の補助を仰いだのではないかとしてをられる。（このことは漫吟集中の契沖の和歌の題詞が物語つてゐる）しかしさうしたことが何時頃まで續いたかといふことは確かに知ることができないのであつて、契沖の晩年に至るまで續いたとは考へ難いのである。といふわけで晩年の彼は曼陀羅院住職といふ名目を得てなにがしかの食祿を得てゐたのであらうと考へるのである。

註　義剛の「錄沖公遺事」によれば、圓珠庵における契沖の萬葉集の講筵は元祿九年から始められたといふことであり近世畸人傳に傳記されてゐる沖門の今井似閑・野田忠肅・海北若沖などは、この頃契沖の聲咳に接したものであらうと思はれる。

次に圓珠庵のことについて語らう。といつても契沖時代の圓珠庵について新しい資料をもつてゐるわけではないから、それについては久松博士の御研究なり、昭和26年7月に大阪大學文學部國文學研究室で發行した語文第三輯「契沖特輯號」所收の諸先生の論考を御參照ねがふことにしたいと思ふ。

それでわたくしは戰後の圓珠庵がどういふ經過でどうなつたかといふことを報告して與へられた責をふさぎたいと思ふ。

契沖終焉の處として史蹟に指定されてゐた圓珠庵は昭和二十年三月二十三日の空襲にあつて燒失してしまつた。契沖の稿本やその他の手澤本はすべて大阪立府圖書館に寄托されさらに泉州犬鳴山中の某寺に疎開されてゐたのでさうした貴重な資料のすべては事なきを得たのであるが、過去帳はなくなつてゐるために歷代住職の名さ

へ知り得ないと言つた現狀である。

契沖時代はおそらくさうではなかつたであらうが、何時の頃からか圓珠庵は眞言宗御室派に屬してゐた。ところが戰災復興のために昭和廿一年五月、眞言宗豐山派に所屬がへして大和長谷寺の末寺となり、廿四年春には長谷寺の助力によつて燒跡に庫裡一棟が假設されるに至つた。廿五年秋、本格的再興を發願した同寺では、近鐵編纂室勤務の田村吉永氏を介して同室長の北島葭江氏に圓珠庵再興の方途についての相談を持込んだ。相談を受けた北島氏は營利を目的とする電鐵會社では到底さうした事業に關與できないと考へ、大阪女子大學の平林治德學長にはかられたところ、在阪國文學者の懇親團體である大阪國文談話會を母體として、圓珠庵再建後援會を設立したらよいといふことになり、談話會員の賛同を得て直ちに募金運動にかかつたのである。廿六年一月廿六日には朝日新聞大阪本社講堂において久松博士以下諸學者による「契沖阿闍梨二百五十年記念講演會」なるものを開催契沖顯彰運動に最初の盛りあげをはかつたのであつた。つづいて五月七日から十二日まで大阪三越において「契沖展」を催し、契沖關係の諸資料を展觀した。かくてこの年の十月四日までには、約六萬圓の淨財が寄せられるに至つたことが收支報告書に記錄されてゐるのである。

ところで、右の記念講演會が開催された二日前の一月二十四日毎日新聞朝刊にスクープされたところによると圓珠庵にある五井蘭洲の撰になる契沖の墓碑銘の碑文面が、戰災後そつくり剝落しかけてゐたのを、當時の奈良師範學校の教官高田十郎氏が持ち歸つて保存してゐるといふことであつた。この高田氏はその後亡くなられたといふことであるが、碑面保存の功を認めるにしても、それがいつまでも契沖に何の緣故もない處で私さるべきものではないといふことだけは明らかにしておきたい。

ついで廿七年冬の或る日、大阪國文談話會々員の中で「このたび折りいつてのお願ひ申しあげたきことができましたのでぜひ御光來賜りたく云々」といふ案内を受けた者があつた。先生たちはその招待の夜に、はじめて、〃藝者學校〃なるもののあることを知つたといふことである。そこの生徒および卒業生つまり藝者および半玉たちが來年の春、大劇場で東京の「あづまをどり」の向ふを張つて「大阪をどり」なるものをするので、ついてはその脚本原稿を書いてほしいといふのが藝者學校校長の注文で、それに契沖顯彰の所作物を一つ加へてといふのが談話會當事者側のみそであつた。

廿八年四月一日から十二日まで、大阪歌舞伎座において大阪南地藝妓總出演と稱する「大阪をどり」がかかる

ことになつた。談話會々員十三氏が作詞した長唄・義太夫があの絢爛たる舞臺に太閤を舞はしめ、契沖を踊らしめたのであつた。一方、談話會ではその入場券を賣るために會員は東奔西走、府市教育委員會は所管の各學校にそれを斡旋し、會としては五十萬圓近い收入を得たが、このため教育現場からは「學校で藝者をどりの券賣りをさせるのは全く困つたことだ」といふ苦情が新聞紙上を賑はせたりしてちよつとした波瀾があつた。

はじめ圓珠庵再建後援會といつてゐたものがいつの頃からか契沖阿闍梨顯彰會といふ名にあらたまつて趣意書などの印刷物がくるやうになつた。この年も暮の十五日に圓珠庵住職の北覺隆氏は再建の日を待たずして七十三年の生涯を閉ぢられた。そして同氏の長女政子氏の夫北海賢氏が住持の職を襲がれることになつたのである。

大阪府・大阪市からも夫々五十萬圓づつの寄附がありその他學校や個人などのを合はせて二百八十萬圓近くの基金が昭和廿九年の末にはできた。起工式はその十月十八日に行はれ、二十四日ごろからぼつぼつ工事にとりかかり、冬空も澄み渡つた十一月廿五日に上棟式が行はれた。

はじめ、法隆寺の復元工事の設計監督をされた淺野工學博士に依頼して圓珠庵の復元が構想されたが、それに要する費用が莫大なのと、全く燒失してしまつた史蹟を復元したところで指定物件にはならないのだから、むしろ現代風にして記念館とした方がよからうといふ意見が大口寄附者の府あたりから出て、復元計畫はとりやめになり、記念館建設に計畫は變更されることになつたのだといはれてゐる。それは大阪女子大學講師の角尾篤彦氏の設計によつて前埼工務店の手で着工。三十年六月中頃に工事は一應完了した。そして七月八日に契沖阿闍梨顯彰會の理事會がこの記念館で初會合を開いたといふことである。

それにしても境内の墓を修築したり、遺品や自筆本などを保管する文庫の建築などはなほ先に豫定されてゐるところで、それらのためにはまだ約三百萬圓近くが不足してゐると報告されてゐる。わたくしはこれができるだけ淨財でもつて滿たされ、顯彰會の計畫が一日も早く實現することを祈るとともに、讀者諸賢におかれても應分の合力を下さつて契沖の學德顯彰の上に一石を投ぜられんことを願ひ禿筆をおくこととする。

附記　元祿八年の「寺院判形帳」は四天王寺と、大阪江戸堀の金森旅館女將長谷川福恵氏所藏のものと二部あるが、兩書とも殆んど同一のものである。本稿執筆にあたつて圓珠庵北海賢氏ならびに大阪女子大學跡見昌雄氏には一部資料の提供をうけた。

五井蘭洲撰の契沖墓碑銘と懷德堂との關係については前記「語文」所收小島吉雄博士の解説を御參照ねがひたい。

訂正

本誌「契沖、曼陀羅院、円珠庵」の文中、北海賢氏、北覚隆氏とありますのは夫々、苑多海賢氏、苑多覚隆氏の誤りですので、謹んで訂正いたします。

（八木）